慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東シナ海, 蛇性の伝承
Sub Title	The tradition of serpents in the East China Sea
Author	野村, 伸一(Nomura, Shinichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.240(245)- 252(233)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0252

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東シナ海，蛇性の伝承

野村　伸一

上田秋成の「蛇性の淫」は紀の国三輪が崎の豊かな漁師の息子豊雄に蛇性の美しい女真女子が思慕した話である。この物語では，男はまったくのでくの坊で，女の一途な思いとその激しい行動力が一際，人の目を見張らせる。

二人は雨宿りが縁で偶然に出会う。そして女は名乗りをする。その名を便りに尋ねてきた男に，女はみずからが寡婦であること，そして今後ともに暮らしたいと申し出る。男はいわば，主体性のない過保護で，親の許しがないから今宵は泊まれぬとて，剣をもらって帰ってしまう。そしてのち，その剣がもとで波乱が生じる。女は実は蛇神であった。

その顛末はいろいろ脚色されていて，相応に楽しめるが，それはともかく，気になる点がある。まず，転居先で結婚することになった豊雄と真女子のあいだがあっけなく割かれることである。すなわち，大倭の神社に仕える当麻の酒人が女の蛇性をみやぶると，真女子と従者まろやは瀧に飛び込んで失せてしまったというのである。次に，周囲の斡旋で豊雄が庄司のむすめと結婚したあと，また真女子が物の怪さながら出現するが，その場面こそはひじょうに緊迫しているにもかかわらず，結末は，やはりあっけない。すなわち，小松原の道成寺に法海和尚なる人がいて，この人の教えの通りに芥子の香に浸みた袈裟をもって蛇性の女を押し伏せる。そして鉄の鉢に封じ込めてしまって終わりなのである。寺の前には「今猶蛇が塚ありとかや。庄司が女子はつひに病にそみてむなしくなりぬ。豊雄は命恙なしとなんかたりつたへける」[1]などといって一篇は終わっている。

上田秋成の「蛇性の淫」は中国の白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」や「雷峰怪蹟」によっている。そして，原典では，怪異の出現は幾度もくり返され，そのたびに「法」，達人により克服される。そうした点を整理してきっちりとした構成，典雅な文体で一篇の怪異譚を描いた手法は巧みであった(2)。文体や筋運びについては確かにそのとおりだとおもう。

ところで，この蛇性の伝承について，わたしは次のようなことを考えている。

1) 蛇が女となることは自明のことなのか。
2) 蛇が人間と結婚する話は必ずしも忌むべきことではなかったのではないか。
3) 蛇性を否定的にみて，封じ込めたことで終わる「結末」は物語としてもつまらなく，まさに，安易な踏襲ではなかったのか。

要するに，はたして「蛇性」は「淫」としてだけ受けとめられていたのだろうかということなのである。

1．閩は蛇種

中国福建省一帯の古名は閩，そして閩人は後漢の時代の『説文解字』によれば，「蛇種」とされていた(3)。

この東シナ海に接した地域の蛇神信仰は古来名高く，その民俗は近現代にまで維持されてきていた。徐暁望『福建民間信仰源流』は，これを簡潔かつ的確に叙述していて興味深いものであるが，ここでは，そのうちのいくつかを摘記しておきたい。

まず，民間の習俗として農村の婦人たちは「蛇簪（サーザン）」をかざした。『閩雑記』に説（い）う。

福州の農婦，多く銀の簪を帯（みにも）つ。長さは五寸許（ばか）り。蛇の首を昂（もた）げる状（さま）を作（な）し髻（もとどり）の中間（なか）に挿す。俗に蛇簪と名づく。…簪は蛇の形に作る。乃ち其の

始めの義を忘れず。

要するに髪をぐるぐる巻いて起こすのを好む，黒い蛇がとぐろを巻いているようにするというのである(4)。

蛇は人びとの生活と親しい関係にあってけっして忌むべきものではなかった。漳州の人びとは蟒蛇あるいは黒い無毒の蛇を捕らえない。『閩雑記』によれば，

大田県は蛇多し。夏の夜常に人の床に上り共に睡(ね)る。灯無き夜，起き，毎(たびごと)に誤りてこれに触れる。然れども人を噬(か)まず。

という。あるいはまたこれらがイエに出入りするのを妨げないで保護する。しかも，その人には福気が授かると人びとはいう(5)。

蛇は蛇王として廟にまつられることもある。蛇崇拝においてもっとも熱心なのは水上民で，樟湖坂の蛇のまつりはよく知られている。これを信じる人びとは閩江の難所をたくみに乗り切る船頭たちである。かれらは，のちになると，人格神をまつるが，はじめは龍や蛇をまつったものとおもわれる。特に，7月7日のまつりにおいては，数十年前まで，人びとは活きた蛇を持ってカミのあとについて練り歩いた(6)。かれらは，正月の元宵節にも蛇灯をあそばした。すなわち行進があり川辺で蛇灯を舞わした(7)。

さて，閩の地における蛇神信仰は必ずしも，「崇拝」のかたちでだけ維持されてきたのではない。一方では，蛇精を忌むべきものとして抑圧しようとすることも歴史的には絶えずおこなわれてきたとみるべきである。その典型的な事例は4世紀前後の事情を反映している『捜神記』にすでにみられる。

それによると，人をもって大蛇をまつる習俗があったこと，ところが，供犠の身の上となった寄というむすめが剣を用意してこの大蛇を退治したことが語られている(8)。蛇神は充分に敬われ祭祀されていたが，一方で，これを不合理，迷信とみる「合理主義」の伝統もすでに一千年以上にわた

って存在してきた。にもかかわらず，閩の人びとは蛇性を忌避しなかった。そのことは次の伝承に明らかである。

明代の民間伝承を多数含む『閩都別記』には，蛇を母とする二人の息子の物語がある。

永福の方広岩に一蛇精有って葉青選を夫とし，二子を生んだ。長子，名は施郎。年二十二歳にして尚かつ妻無し。隣家，陳仲信に二女有り。媒人の李七，葉家の為に作媒す。李七，高い聘金を許するのみならず，蛇の，人を咬みに来らんことをもって陳家を威嚇す。されば，陳仲信は二の女の意見を征求む。姐，先に答えて曰く，「人は都てかれの蛇精たることを暁得る。誰か肯えてこれに嫁がん」と。仲信，李七の教す言をもってむすめに説く。掌珠の答えて曰く「爺爺はなんとして奴家を蛇の子に与えんと想えり。蛇は最も毒たり，若しも意の如くならぬとなら，蛇の母の肚内に呑み入れられん，寧ろ爺爺，蛇の咬を乞うべし。女，なんぞ蛇に嫁すことを肯ぜんや。」

この結果，妹がこの婚事に応じたという(9)。

さて，今ひとつは，より興味深い話である。

葉青選は白蛇の精繆隠仙の助けを得て方広岩下に薬店を開く。蛇，百薬を認識るに因り生意は特に好し。人面蛇はかれらの第二子。落盆るや乃ち人頭蛇身，母の隠仙，これを棄てんとするも，青選のいわく，「頭は父に似て身は母に似る。真に乃ち汝と我の血脈，なんぞこれを棄てるに理有らん」と。姑く留めて乳を哺ます。これを名づけて夔郎という。葉夔郎，長大って后，母親の法術を継承し四処に行善す。かれはかつて妖精の羊頭靈を殺死し，讖語をもって張献忠の入閩の計画を嚇退た。かれはまた薬を採みとり人を救い，医者により行業の神と奉られた(10)。

まことに不思議な世界で，ここでは母の蛇性は人面蛇の息子に伝わり，

広く人びとを救った。とはいえ，長男の嫁取りにおいて隣家のむすめは蛇性を厭悪し，また母は生まれてまもない人面蛇の子を棄てようとした。これは，明代には一般に，蛇性を疎んずる気風も相当に広くあったということをものがたっている。

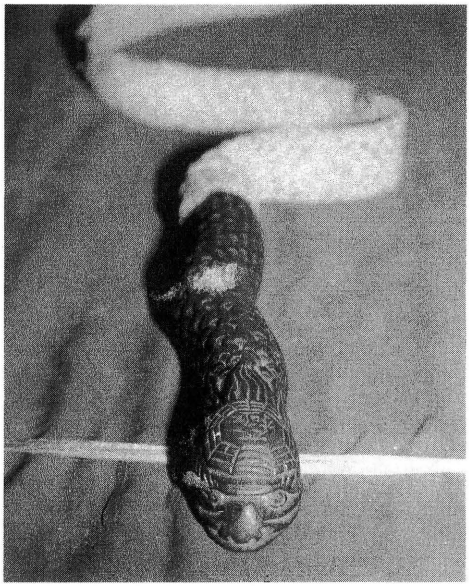
こうした見方をもたらしたのは儒者や仏者，それと同時に道教の担い手たちでもあっただろう。たとえば閩の地の偉大なる女神のひとつ臨水夫人[11]は，紀元一千年ごろに実在した陳靖姑という名の民間の巫女であった。ところが，これが広く信奉されていくにつれ，蛇を操る道教の担い手として位置づけられていった[12]。いわばこの民間の女神は出世したのだが，その過程で在来の蛇精が平定されていくことはみのがせない。すなわち臨水夫人は閩の地にいた数多くの女神や蛇神を従えてその頂点に位置づけられていったのである。特に白蛇の精との壮絶な戦いはさまざまに脚色され，陳靖姑の死の直接の原因もこの蛇神によるとされた。しかし，のちに白蛇の精は制御された。それは形式を整えた道教の法術の勝利を意味し，それがまた民間伝承でかたられる蛇性封じ込めの淵源となったと考える。

2．台湾の蛇性伝承

台湾の漢族社会は閩南の人びとの移住により成立した。そこでは蛇性はどのように受容されたのであろうか。

まず基本的には閩南の人びとと同じ態度で蛇に臨んでいたとおもわれる。日本の植民地時代の伝承であるが，桃園郡南崁廟の建設の際に大蛇が発見された。人びとはこれについて，神蛇あるいは使者公といった。みても殺さず，カミとして畏敬した。あるとき，この蛇の巣窟であった廟前の大榕樹が倒れて蛇の姿がみえなくなった。すると，参詣者も次第に減少した[13]。

南崁廟の信者たちはこの蛇を指さすことはなく，いわんや取って食うなどということはしない。この蛇が家にはいってくると「此の上もない目出度い吉兆であるとてすぐさま線香を焚き，金銀紙を焼いて歓迎し，祈願し



▲図版　台南の紅頭法師の用いる法縄

又は感謝をする」のだという[14]。

これは閩の蛇神崇拝と同じことであり，さらに後述する済州島のそれとも通じる。こうした民間の手厚いもてなしが今日なお残存しているかどうかは定かでないが，ただ，台湾台南市の臨水夫人廟あるいは玉皇宮などにおける紅頭法師[15]または道士の儀礼においては，蛇のかたちをした法縄が悪鬼除けのもっとも重要な法具のひとつとして尊重されている。

この法縄あるいは法索は騰蛇（タンサ）ともいわれ，明らかに「蛇」である。そしてこれはさらにあがめて金鞭聖者ともよばれる[16]。臨水夫人廟では，女性や子供の改運，あるいは女性の生命力の在処である「花園」の強化儀礼がよくおこなわれるが，これに先だって，「橋」を通過する。その際に，この法索が縦横に振り回されて場が浄化される。

こうした今日の儀礼は少なくとも千年の歴史を持っていた。エバーハルトは幅広く文献を渉猟して中国の地方文化を論じたが，その越文化の項で，「建康（江蘇）には1153年に道士の衣を着て厄祓いの呪文を唱え，素足で髪を振り乱しながら大蛇を操る男がいた」「祭祀の主は民間道士とも呼ばれる村落巫であることがわかる」と述べた[17]。これは上に述べた台湾の紅頭法師の儀礼のまさに原初の姿である。はじめは本物の蛇を手にとって儀礼をしていたのである。

ここには蛇性を忌むどころか，蛇をカミとしてあがめる人びとの真剣な

まなざしがあったはずである。

3．済州島の蛇性伝承

済州島は俗に三多の島といわれる。風，石，女の三つが多いという意味であるが，済州島を代表する民俗学者の一人，秦聖麒は，かつてなおひとつ加えて，四つ目に多いものとして「蛇の多いこと」があげられるといった(18)。

秦聖麒の「済州島の蛇信仰」は，済州島における蛇神に関する各種の資料を指摘しつつ，その淵源を幾つかに分類して論じたもので，この蛇神の問題を戦後はじめて論題として取り上げたものとして貴重である(19)。ただし，そこでは中国南部への視座が欠けていた。およそ東シナ海の周辺に対する目配りがなされていなかったために，済州島のみに特異な蛇神信仰があったようなことをいっている(20)。このことは限界である。

とはいえ，秦聖麒は，蛇神信仰は済州島人の内面生活を解き明かそうとするとき直面するもっとも重要な問題のひとつだと述べている(21)。そして，そのいくつかの指摘は済州島人の立場からのもので，いかに蛇神が人びとの暮らしと密接なものかが伺われる。

たとえば済州島では，家庭で祭祀(チェサ)(22)をするときにも，イエの内外にまつる「内の七星(アンチルソン)」「外の七星(パッチルソン)（後ろのお婆さん(トゥイッハルマン)）」を併せまつる。またイエに蛇がはいってきたときは「水（をもたらす）お婆さん(ムルハルマン)」といいつつ，米を撒いてよびよせる。あるいは，外で蛇をみかけても，これを指さしてはならない，そのようなことをすれば指が腐るともいう(23)。

こうした習俗から予想されることだが，済州島には蛇神の本縁譚(ポンプリ)がいくつも伝承されていて儀礼のなかで演じられる。なかでもよく知られているのは，「七星本縁譚(チルソンポンプリ)」と「兎山堂本縁譚(トサンダンポンプリ)」である。これはいずれも，海を越えてやってきた蛇神で，しかも女性神である。済州島では一般に海彼から来臨する女神が住民に迎えまつられることで富や豊饒をもたらすとする伝承があるが，ここにあげた蛇神にもそれがいえる。

「七星本縁譚」の主人公は江南の長者のむすめであった。これが，父母

のいないときに僧の子をはらんで流された。済州島に漂着してから，七人のむすめを生むが，母もむすめもみな蛇であった。そして，母親は官庁の部屋あるいはイエのなかを守り，むすめたちはイエの内あるいは納屋を守るカミとなった(24)。それが集約されて前出のアンチルソン，パッチルソンといわれている。

一方，兎山堂の蛇神は，これよりはもう少し入り組んだ来歴があり，また民間信仰としてもいろいろ解明すべき点が残されたものだといえる。この蛇神は全羅南道の山にいた大蛇であったが，儒者とおそらくは道教的な法の使い手により追放された。そして済州島にやってきたのだが，当初，兎山里にあって迎えまつられなかったがために，神威を顕わし，ムラのむすめたちを死あるいは病にいたらしめている。そののち，イエの祖先として手厚くまつられることで瞋恚はおさまり，やがて兎山堂のカミとして定着した。

ところが，この蛇神は威力のすさまじいカミで，ムラの女性たちが嫁したのちにもまつることを要求する。そして嫁ぎ先からまたむすめ継ぎでまつられていった。こうした背景で兎山堂の蛇神は済州島のほぼ全域にその信仰圏が広がった。

ところで，これらの蛇神信仰をはじめ，その他，若い女を犠牲にしてまつったとおぼしき大蛇の存在（金寧（キムニョン））は儒教合理主義の目の敵でもあった。そこで，これを封じ込めようとしたことの記録がいくつか残されている。その状況は前記の閩の社会状況とよく似ている。金寧のばあいは，秋葉隆がいちはやく記した(25)のでよく知られているが，その話はさながら済州島版ヤマタノオロチ退治である。

こうして済州島においても，ふたつの蛇性伝承がみられる。ひとつはイエ，ムラをあげていつきまつる蛇神であり，他は「安寧」「平和」を脅かす，荒々しき蛇神である。

だが，その文化的な脈絡を考慮するとき，七星本縁譚に代表される蛇神信仰がより基底にあったであろうことは容易に推察される。そして，その上で済州島の蛇性は儒者により抑圧され，また一部は神房により制御され

ていったと考えるべきである。

ただ，神房の儀礼のなかで，蛇性は悪しきモノ一辺倒ではなかった。この辺は道教儀礼における蛇性とはいくらか異なる。すなわち神房は，本縁譚のなかで蛇神を説くときはカミとして敬い，一方で「竜(ヨン)ノリ」[26]として演戯するときは，悪しきモノとして扱っている。いうならば，蛇性は神房のクッのなかでは善悪ふたつの面をもって演じられるのである。

4．まとめ

日本の南島の蛇性についても当然，東シナ海周辺のものとのかかわりにおいてみていくべきだが，ここでは紙幅の制約から，一点だけ記しておきたい。

それはむすめたちの「三月あそび」の一環としておこなわれた船遊びにかかわる伝承である。琉球では旧三月三日に浜降りという行事が広くおこなわれていた。これは地域ごとのかたちがあるが，浜辺で踊りつつ厄を海の向こうに追いやるというのが趣旨のようである。とくに島袋源七の次の記述は示唆するところが多い。

（村々の乙女たちが）浜に円陣の座席を設け，鼓に合わせて歌いかつ踊り狂うので，その一日は文字通り天下御免の自由な日である。興が尽きれば小舟に乗って船遊びをする。これを「流(ナガ)り舟(ブニ)」という。渚に悠々と竿をさし乍(なが)ら鼓に合せて歌う。若い男達はこの様子を見る事は許されても近ずく事はしない[27]。

島袋はこれにつづけて，三月三日の習俗の起源伝承として，むかしあるむすめが相手不明の男と通じて子を宿したので，隣家のお婆さんの勧めで浜に降りたところ，無数の斑蛇(アカマター)の子を流産し，これでむすめの厄が払われたからだということを記している。そして「おそらく，災厄を乗せた小舟を流す古風の名残ではないか」と結論づけている[28]。

簡単な記述だが，ここにはむすめたちがもとは浜辺でアカマターという

来訪者を迎え，かつ船に乗せて送ったことが示唆されている。あるむすめが浜辺で「斑蛇（アカマター）」の子を無数に生んだというのは，それだけみれば異常な伝承であるが，済州島の七星本縁譚などとも通じるもので，蛇性伝承のひとつのかたちである。むすめたちが跳舞して興じたのは歓迎の意であろう。いうならば，その来訪者は必ずしも災厄だけをもたらしたのではなかった。

しかし，時とともに災いの船流しのモチーフが強くなった。それで，斑蛇（アカマター）の子を「流産」し，それで「災厄」が払われたというようになった。それは，わたしの考えでは，海の向こうからきた畏怖すべきモノがむすめにとりついていたが，今やそのもてなしに満足してもどっていくということを示すものである。一方，こうした観念を含んでいたので，この行事には男たちの接近が禁じられていたのであろう。

さて，最後に日本本土においての蛇性伝承をもう一度振り返ってみたい。

日本では蛇性をめぐるさまざまな可能性は要するに道成寺の伝承に集約されてしまった。蛇の化身である女が男をみそめ，逃げる男を追いかけるも，僧あるいは験者の力で圧伏されるという物語である。そこでの最大の問題は蛇性が「淫」としてしかえがかれないことであった。すなわち，性的な願望，執念，怒りなどの象徴として蛇性が用いられていた。しかもそれを現実に担ったのは寡婦，あるいはむすめであった。

このことは能により美化され固定された。そして「道成寺」関係の論著の数多いことを通してみると，それを日本の美学のひとつとして受容する人びとは相当数いるはずである。しかし，「道成寺」はいかに美しくえがかれようとも，一時代の狭く限定された美学でしかなかった。そのことを問題とする視点はないわけではなかった。そのひとつ，乾武俊は，寺の鐘のなかに女の執念が封じ込まれることでよしとするわけにはいかないと論じた。乾は，鐘のなかにはいるのがもとは「男」であったものが能「道成寺」では「女」になっていることを指摘しつつ，その交換に「中世」の意味を感得した。そしていう。

「女」は「鐘」を引きおろし，引きおろした「鐘」の中で「地の霊」に「変身」する。そのドラマを描いたのが能「道成寺」であった(29)。

しかし，能は鐘の響きを鳴らさなかった。その代わりに，「恨めしやさしも思ひし鐘の音を。尽くさで我れに帰れとや」と謡がはいり，ただ女の身体言語で表現させた。乾はその自分なりの論理で，「地の霊」の解放の暁には道成寺の鐘も鳴るはずと述べた。ここで乾のいう地霊たちの解放とは，地獄変相の図をまさに日々生きざるをえない民衆の解放ということなのだろうが，それは中世を過ぎて今日にいたるまで実現してはいない。能で実現したのは，験者たちの蛇性圧伏の勝利であり，「望み足りぬと，験者たちは，わが本坊にぞ帰りける」という「後味の悪い結末」(30)であった。

民俗芸能のなかでは，壬生狂言に白拍子と二人の僧との絡む「道成寺」が演じられ，これなどは余計な解釈のはいらぬおおらかなものというが，総じて，山伏の験力の誇示に終わるものが多い。こうしてみると，蛇性の伝承に関しては民俗のものといえども，時代の呪縛を引きずっている。たとえ，これでなおよしとするにしても，まずはこのようなものではなかった蛇性のありかたについても思いをめぐらしてみるべきではないか(31)。

そしてなおいえば，ことは「蛇性」には限らない。流れ寄るフネ，訪れるモノなどについても捉え返すことが必要である。比喩ではなく，今おもうべきは，「海彼」ということなのである。

注

（1） 中村幸彦校注『上田秋成集』日本古典文学大系56，岩波書店，1970年版，121頁。
（2） 前引，中村幸彦校注『上田秋成集』，14-15頁。
（3） 閩，「東南越，蛇種なり」（白川静『字統』，平凡社，1984年，734頁参照）。
（4） 徐暁望『福建民間信仰源流』，福建教育出版社，1993年，29頁。

(5) 前引，徐暁望『福建民間信仰源流』，39頁。
(6) これは今日復活されている。ただし，本物の蛇ではなく竹製の大きな蛇王（蟒蛇（マンシエ）の精）を持って練り歩く（陳松民・楊慕震「福建南平市樟湖鎮崇蛇文化内函探微」『民俗曲藝』第102期，1996年，台北、50頁参照）。
(7) 前引，徐暁望『福建民間信仰源流』，41頁。
(8) 干宝著，武田晃訳『捜神記』東洋文庫10，平凡社，1964年，365-367頁。
(9) 前引，徐暁望『福建民間信仰源流』，38頁。
(10) 前引，徐暁望『福建民間信仰源流』，46頁。
(11) 臨水夫人は，今日なお難産を救うカミ，また子供の肥立ちの面倒をみるカミとして信仰されている。これについては次節でも触れた。なお，閩の地に由来するもうひとつの偉大なる女神は媽祖であり，こちらは宋代以降，全中国的な信仰を集めた。
(12) 前引，徐暁望『福建民間信仰源流』，333頁。
(13) 曽景来『台湾宗教と迷信陋習』，南天書局有限公司，1995年（原版1939年），310頁。
(14) 前引，曽景来『台湾宗教と迷信陋習』，312頁。
(15) イエあるいは個人の依頼に応じて改運，治病，祖先供養，祈子，育児などに関する儀礼をおこなう。一般に頭に紅布を巻くのでこうよばれる。道士も類似のことをやるが，法師と道士はやはり区別される。ふつう法師は大規模な儀礼「醮」はやらない。これは道士の仕事である。
(16) 台南市在住の林俊輝道士の教示（1998年3月）。
(17) W. エバーハルト著，白鳥芳郎監訳『古代中国の地方文化』，六興出版，1987年，336頁。
(18) 秦聖麒『済州島巫俗論考』，済州民俗研究所，1993年（原版1966年），205頁。
(19) 植民地時代のものとしては，秋葉隆「済州島に於ける蛇鬼の信仰」『青丘学叢』第七号，1932年がある。なお，これはのちにいくらか整理されたかたちで『朝鮮民俗誌』，六三書院，1954年に採録された。
(20) 前引，秦聖麒『済州島巫俗論考』，223頁。
(21) 前引，秦聖麒『済州島巫俗論考』，200頁。
(22) 四代までの祖父母の霊に対して，その命日ごとにイエで儒式をもってまつること。
(23) 前引，秦聖麒『済州島巫俗論考』，200-201頁。
(24) 母子の定まったところについては地域による伝承差がある。前引，秦聖麒『済州島巫俗論考』，219-220頁参照。

(25) 秋葉隆『朝鮮民俗誌』，復刻版，名著出版，1980年（原著は1954年），221-222頁参照。

(26) この祭儀性の濃いあそびについては鈴木正崇・野村伸一編『仮面と巫俗の研究』，第一書房，1999年，288頁以下参照。

(27) 島袋源七『沖縄諸島の古謡と舞踊』，また本田安次『沖縄の祭と芸能』，第一書房，1991年，218-219頁も参照。

(28) 前引，本田安次『沖縄の祭と芸能』，219頁。

(29) 乾武俊『黒い翁　民間仮面のフォークロア』，解放出版社，1999年，177頁。

(30) 前引，乾武俊『黒い翁　民間仮面のフォークロア』，186頁。

(31) たとえば，和泉葛城の山近い里では，「蛇」は雨をよぶものとしてうたわれ踊られていた。その詞章では，三歳のとき，山伏にみそめられたむすめが十年後に再会し，やがて山伏を追いかける（前引，乾武俊『黒い翁　民間仮面のフォークロア』，195-196頁）。そこでも「むすめのおそろしや」が強調されるが，感傷とは縁遠いおおらかな響きが感じられる。本来，日本においても蛇性はこうしたものであったのだろう。